
少女探偵

銀咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女探偵

【Nコード】

N3376Z

【作者名】

銀咲

【あらすじ】

とある浪人の

お話です

読んでみてね

始まり

ここは福岡、日本の大都市の一つである。

ビルの多い方では人がせかせかと歩いている

坂上洋はそんな所の中心である福岡市博多区に来ていた

「やっと付いたな…ざっと2時間ぐらいか」

博多駅から出て来た洋は、バッグの中にある一枚の紙を取り出した紙には

助手募集中！！

詳しくは事務所まで

という文字が並んでいた。洋は中卒の浪人なので就職が難しく助手として雇ってくれないか相談しに来たのである

「こっからはどうやって行くか…」

目の前にはバス停とタクシー乗り場があった

タクシー乗り場では、運転士が暇そうに欠伸をしている

バス停には何人かの人がバスがくるのを待っている

「徒歩でもいけるかな？」

紙には

博多駅から徒歩1時間！！

と書かれていた

「これは…近い訳ではなさそうだな」

どちらでいくか迷っていると

「ねえ」

後ろから声をかけられた

邪魔になったのかな？と洋は思いながらも、後ろを振り返って見た

「何ですか？」

そこにいたのは制服をきた少女でした

「その紙…もしかしてその助手になるの？」

女の子はいきなりそんなことを聞いて来た

「ん〜一応そのつもりだけど、何で？」

少女の答えは意外なものだった

「探偵とその関係者とはあまりかかわらない方がいいって聞いたから…」

女の子が言うには探偵はいろいろな所に足を突っ込んでいるからいつ危険な目にあってもおかしくは無い…というものだった

「なるほどねえ」

洋も何度かそう思ったことはあったので言いたい事はすぐに解ったしかし

「それでも行くこうと思つよ」

「何故ですか？」

少女が聞いて来たので、洋は答えた

「探偵に憧れていたのさ」

「何故ですか？」

二度も同じ文で質問をされた洋は

「前に一人の探偵に助けられたからだよ」

と答えた

「そうなんですか」

ちよつと驚いたように少女は言いました

「そんな反応をするって事はここにいる探偵は何か問題でもあるの？」

女の子は

「そんな事は無いです。普通の人ですよ…アレですけど」

「アレとは？」

「会ってみたら解りますよ」

それから何度か聞いて見たけれど、少女は教えてくれなかった

少女とは別れてバスで行く事にした

バス停から約3分の所にあるアパートの前に洋はついた

「何号室だっけ？」

「何がですか？」

洋がバッグに手を入れようとすると、後ろからいきなり声がかかってきた

振り返ってみると、女の人が立っていた

「あの〜ここに探偵がいるってインターネットで知ったんですけど」「わたしがそうですよ」

と言つて来た

「本当ですか!？」

「嘘です」

女の人はクスクス笑ながら言った

「私はこの大家さんみたいなのです」

「そうなんですか…」

「その探偵は105号室に居ますよ」

大家さん(?)はそう言つてアパートの中に入って行った

なんだつたんだ?

洋は思ったが

まあいいか…

洋は号室を忘れないようにしながらアパートの中に入って行った

「あっ」

105号室にいたのは、駅にいた少女だった

今も何処かの制服を着たままりビングのソファに腰掛けている

「初めまして…はもう遅いよね」

「探偵だつたんだ…」

「そのと〜り!」

少女は胸を張つて言った

「という訳でよろしく!」

少女探偵の名前は星野楓、洋と同じ16歳らしい
彼女の方は洋と違って中卒浪人では無い様だ

「何であんな事言っただの？」

「あんなことって？」

「駅で話した探偵がどうのこうのって奴」

「ああ、あれは普通の意見を言っただよ」

「じゃああの時言っただアレって？」

「未成年っていうこと」

「なるほど」

「そんな事より、いいの？うちの助手になって」

楓は洋に聞いた

「別にいいよ、雇ってくれるなら」

洋はあっさりと言った。

「ゴツいむきむき探偵よりかはマシだよ」

「確かにそうだね！」

楓はそう言つと、いきなり立ち上がった

「よし！いくぞ！！」

「いくつて何処に？」

「大家のとこだよ！！あんたもここに住むんでしょ？」

「そうだったね」

「106号室が空いているはずだからそこに住んでもらうよ」

「大家さんに聞く前に決めても…」

「あの人なら大丈夫！！」

「まあ、あの人なら大丈夫そうだな…」

洋は頭の中でくすくす笑っている大家さんを思い浮かべた

「いいよ」

大家さん（神崎 香美…というらしい）は要件を聞く前からOKを出した

「106だろ？もう片付いてるよ」

「ありがとうございます」

大家さんはずっともいい人だな」と洋は思った

「二人一緒に住んでしまえば？」

「そ、そんな事しませんよ」

「よし、話は終わったから早速部屋に行ってみよう！」

途中から飽きて話を聞いてなかった楓はいきなり洋の襟を掴んで引っ張りながら歩き出した

106号室は大家さんの言った通りに綺麗に何もなかった

あるのはコンロと洗濯機とベットだけだった

「ここが今日から君の根城だよ！！」

楓はこのルールなどを教えてくれた

「ここには大家さんと私以外には2人住んでいるよ」

「その二人は？」

「外室中らしい」

そんな話を話していると

ピンポン ピンポン

チャイムがなった

「誰だろう？」

「大家かもよ」

そしてドアを開けてみると、男の人が立っていた

「始めまして」

とても爽やかな笑顔とともに、挨拶をしてきた

「は、はじめまして…あなたは？」

「俺はこの住人の一人、赤星 白哉です」

「元ホストの人だよ」

いつの間にか隣に来ていた楓が言ってきた

「なるほど」

道理でかっこいい訳だ。美男という言葉がとてもぴったしな人である

「今は違うんですか？」

「遠い昔の話だよ……」

「仕事より趣味を優先した人のいい例：の人だよ」

楓によると、昔はホストとしてやっていたけど、今は趣味のスキーをしているらしい

「まあ、俺の自己紹介はこれまでにして大家さんが今夜はバーベキューだったさ」

「本当ですか？」

「お前さんの入室祝いだって言ってたよ」

「おお、久しぶりにバーベキューだ！！」

楓は寝室に行つて、ベッドの上ではしゃぎ回っていた

「じゃあ、また後で」

「あ、あの」

「ん？」

「もう一人の住人は？」

「今日は帰って来ないっばいよ。あんま気にしなくてもいいよ」

そう言うと、白哉は出て行った

「早く準備しておりて来てね」

楓はそう言うと、

カ〜ルビ〜 豚肉〜

などと歌いながら自分の部屋に戻って行った

「これから大変そうだな」

洋は急いで準備を始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3376z/>

少女探偵

2011年12月11日17時49分発行